

薬事日報連載あとがき：

「連載を終えて 心の芯にしがみついて離れない想いに気づく」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2024.9.24

連載が終わった。一丁前に解放感を満喫している。薬事日報社から謝辞が届いた。ちょうど、美味しく安全なキャットフードを探しているところだった。疑義を避けるために名言しておくが、僕用ではない。

「由緒ある薬事日報社にあんな文体で挑んで、よく却下されませんでしたね。」

僕の連載について、僕の友人・知人・それ以外の人の概ねの感想は、こんなところだ。僕もそう思う。あんな文体で挑んだのは僕だが、採用・発行したのは薬事日報社である。記者の村嶋さんや関係する皆様のリスクテイクに対して、心より感謝する次第だ。

「少しくらいはみ出したっていいさ」と、ミスター チルドレンの桜井和寿さんが名曲、“トゥモロー・ネバー・ノウズ”で歌っていた。僕もそう思う。ただし、どこまでがセーフで、どこからが越えてはいけな一線かは、誰も教えてくれない。

村嶋さんによれば、「今回の連載、時代が時代だったらアレだったかもしれないでしたね」とのこと。問題はアレの定義だ。その一線の“アカン側”なのだろうと察しはつく。

思えば僕は、越えてはいけな一線の“アカン側”に、いつも易々と足を踏み入れてきた。このあたりの愚行録は、幼少の頃から枚挙にいとまがない。

「お前は、どうしても“おふざけ”を入れないと、生きていけないのか？」

これまでに教師や教授や上司や色んな人から、色んな場面で問いただされてきた。

答えは概ねイエス。だって、だってなんだもん。ユーモアがなければ、息苦しい。

今回の連載企画において“アカン側”の文体であると自覚していたものの、自分のスタイルを選択した。あとで自分が読み返したいと思えるユーモアを交えた文章・文体でなければ、とても連載を続ける気持ちになれないと思ったからだ。実際、僕が書く「お行儀のよい」文章は、自分でもビックリするほどつまらない。

小さい頃は、刑事に憧れた。祖母の影響だ。毎週欠かさず、人気の刑事ドラマと一緒に観た。相手がゴソ泥であろうが巨悪であろうが、命を賭けて治安を守る。僕も勇ましい彼らに倣って「太陽に吠えようかしら」と思ったものだ。だが早々に方針転換をした。殉職はしたくない。ボン刑事は、あえなく電話ボックスの中で死んだ。

大きくなってからは、記者に憧れた。「いま、何が起きているのか」を真摯に伝えることに命を賭ける。その姿に魂が震える。精度よく伝えきるために視野を広げ、視座を高

め、伝えきるための筆力を磨く。これだ。なりたい自分が見つかったと思った。だが、この道も選ばなかった。映画やドラマを見過ぎたせいだ。巨悪を暴くと、いつも悲しい末路が待っている。そして僕は、あえなく電話ボックスの中で…。

要するに僕は、これらの職業に神聖さを認めつつも、自身の命を賭ける覚悟を持てなかった。安全なところから身勝手に憧れるのが関の山なのである。だが図々しくも、実際に彼らに接すると、あの頃に憧れた自分の未来の姿をその方に投影してしまう。

このたび、薬事日報社の村嶋さんと大津さんが、小市民である僕の駄文に焦点を当ててコメントを下さった。これは、下劣なりにも連載を書き上げた僕だけが許される特権だ。数年前までは予想もできなかった、生涯の宝物になった。憧れの職業と繋がりを持たた。

参考までに、薬事日報社の歴史について触れてさせていただく。

創刊は1943年。創刊当時は厚生省関連の団体から発行されており、戦後に薬事日報社が設立され、発行を引き継いだ。

薬事日報の紙面は、創刊号からすべて国立図書館に所蔵されていると聞く。このことは、医薬の業界紙としては「日本で唯一」と言えるらしい。このように脈々と続く「しきたり」は、同紙が国の機関紙として始まったことに起因すると思われる。

偉そうに解説したが、全部薬事日報社からいただいた情報の受け売りだ。実は書き終わった後になって、連載をいただく価値にようやく気づいた。身に余る光栄だった。

新しく入手したトリビアは、誰かに伝えたくなるものだ。この興奮を共感してもらいたい。帰宅すると早速、連載を賑わせた当事者に伝えた。

「マッカーサー元帥について書かれたような新聞で、君はネコとして肩を並べたんやで。」

当事者は、意に介さない。聞こえてはいるのだろう。しっぽが上下に揺れていた。食器に顔を突っ込んで、わしわし食べるに終始した。ときどき、カリッという音が聞こえた。



写真1：リビングの出窓にて 連載を賑わせた当事者の近影

連載は、僕と薬事日報社が想定した以上の反響を呼んだ。

連載をはじめるとあたり、薬事日報社から「企て」というものを聞かされた。

当初に要望された“書き手の役割”や“書きっぷり”について、校了した今だからこそお伝えしたい。要求ハードルと期待値の高さに、恐れおののいたことを記憶している。

根は真面目なほうである。連載を読み返していただけると光栄だが、ご要望に忠実に応えられるように、もがいたつもりだ。文体はアレだったが、目指すところに着地したのではないかと思う。薬事日報社から課せられた“お題”を以下に示す。

①薬事日報は、「陰ひなたに咲く才能」を、まんべんなく伝えていきたい

“くすり”が必要なひとに届けるまでの道のりは、果てしなく遠く険しい。世間ではこの事実が、ある程度理解されはじめた。一方で、“くすり”が出来上がるまでには創薬研究の花形業務だけでは立ち行かない現実については、驚くほど認知されていない。

そこで、様々な分野の能力を結集させた“チーム”によって、はじめて画期的な“くすり”が生まれることを広く知ってもらいたい。世界に誇る技術立国であるニッポンには、それぞれの分野に“尖った才能”があることを伝えていきたい。

その試みの最初の題材として、実績と表現力を持つファーストペンギンを探している。

②あまり世間で知られていない“クロマトグラフィー”について、解説して欲しい

創薬研究に関わる数多の研究分野の中でも、あまり取り上げられて来なかった“クロマトグラフィー”で、研究活動全体を一変させる驚くべき成果が上がっていることを知った。

一方で、“くすり”に関わる専門誌ですらこの事実を知らなかったということは、当然ながら世間での認知は皆無に等しいということになる。

そこで、目覚ましい成果を上げている者だけが持つ「論理だけに留まらない情熱と自信」を通じて、創薬研究活動における「クロマトグラフィー技術の意義」を解説して欲しい。

このような周知活動を通じて“気づき”を与え、それぞれの分野における次世代の“尖った才能”を育むことに繋げていきたい。

教科書チックではなく、興味を引く解説力を持つファーストペンギンを探している。

③研究者から起業家になるまでの足跡をたどるストーリー構成にして欲しい

いわゆるエリート研究者でなく、雑草魂を持った「反骨の研究者」が、起業家になるまでのエピソードは興味深かった。特に、宇部市民向けの講演内容をまとめた資料は、読者に共感してもらえやすいと感じたので、そのストーリーラインでお願いしたい。

具体的には、講演資料にあった以下のような切り口が非常に効果的である。いずれも読者が追体験しやすいような図表があったので、そのまま有効利用できると思われる。

複製可能な自己実現の在り方を示せるような、ファーストペンギンを探している。

【講演資料の要点】

✓起業に至るまでの「自己との向き合い方」、「社会に欠けていることの見つけ方」、「自身の強みによる社会に欠けていることの埋め方」を段階的に説明

✓アントレプレナーに至るまでに整えておくべき「マインドセット」と「スキルセット」を獲得するまでの道筋を体系的に説明

✓これからの時代を生き抜くためには、誰もが自身の「強み」を磨き、その価値を他者に認めさせる「伝え方」を身に着ける必要性を発信

✓一見すると研究者のキャリア形成は直接関係がなさそうに思える「文学」を学び、自身と社会の関係を再定義して「わかる」「できる」「伝える」の段階的アプローチ法を構築



写真2：山口県宇部市にて 代表・三輪の招待講演前日の様子 2019.1.31

その昔、「トラだ、トラになるんだ！」と一念発起した。業界のタイガーマスクを目指した。まさかその後に「ペンギンになれ」と他者から命じられるとは思ってもいなかった。それでも何とか、「やぶれかぶれなファーストペンギン・ミッション」を遂行した。そして、薬事日報社から改めて光栄なオファーをいただいた。連載の続行である。少しの期間をおいた後であれば、是非引き受けさせていただきたいと回答した。今後の連載では、「どこからが自ら選んで踏み出さなくてはいけない一線か」について、自分の経験や考えについて触れていきたい。そのような旨で次回の連載を約束した。

僕の「黒歴史をドマラティックに語った」連載は、思わぬ効果を生んだ。

事業を営む上での日常会話が弾むようになった。自覚はないが、僕の目つきは控えめに言って悪いほうらしい。だから最初は、相手をけっこう緊張させてしまう。相手の表情の強張りを見て、僕も緊張してしまう。誰もトクをしない、負のループである。

このカオであっても愛猫家であることが、初対面でも旧知であっても摩擦力を弱めることを知った。およそ週2の割合で、うちのネコの話からはじまるようになった。

「三輪さんとこの、ネコちゃん元気？フローレンスちゃんだったかしら？」

随分いい匂いがしそうな名前だが、誤りを正したい。うちの子は、「おこげ」であり、

「ローレンス」というミドルネーム持ちだ。家族になったときに手渡された血統書には、そう記載されていた。父上はイーサン、母君はベティだった。ハリウッド・スター並みである。その日から彼の正式名称は、「三輪おこげ・ザ・ローレンス」になった。



写真 3, 4：前略、あいつのヒザの上から（左）、前略、あいつのオナカの上から（右）

この連載を通じて、僕にも変化が生まれた。これまでテキトーに散在していた、あるいは忘れていた「自分をつくってきた要素」を拾い集めることができたような気がする。

誰から何を言われようが、自分が大切にしてきた想い。反骨心、開拓精神。

自分に気づきを与えてくれた友人、あこがれの人にもらった言葉。

自分を信じて支えてくれている仲間たちとの何気ない挨拶や、意見の交換。約束。

図らずも自分に起きた、あるいは自分が起こした、たくさんの場面を思い出すことになってしまった。試行錯誤の果てに「強み」を見つけ、それを集約した時間があった。

そして何より、大切にしてきた彼ら彼女らと過ごしてきた時間、これからも一緒に過ごしていけよう時間を、僕はとても愛おしく思う。

彼ら彼女らとの日常を「かけがえがない」と思う感情が、僕の心の芯にしがみついていたことを改めて認識した。うちのネコが、僕の肩口に巻き付いて離れないときのように。

僕は、この先1日でも長くクロマジーンメンバーと一緒に仕事がしたい。

今回の機会を得て意図的に言葉に換えようとしなければ、このような（気恥ずかしい）境地に立てなかったかもしれない。

僕は、この道を選んだ。僕たちは、この道を進む。

この原稿を書き終える頃、おこげちゃんが永眠した。9月のとてもよく晴れた日を境に、彼はもう僕の傍にいない。その厳然たる事実を、まだ受けとめることができない。

おこげが家族になってくれた日、抱っこするとシャンプーのいい匂いがした。小さな首に青いリボンを巻いてもらって来てくれた。それからおこげは、僕のアイドルになった。

17年を通じて僕の膝に乗った。文机に向かう僕の両肩に後ろから飛び乗った。寝ていると問答無用でお腹の上に座りこんだ。

雷が鳴る夜には、か細い声で僕を呼び、肩口にしがみついて離れなかった。

エメラルドグリーンのかなな瞳を覗くと、僕の希望が映りこんでいるような気がした。

つい最近も、「今度は是非、御社のおこげ社長にご挨拶に伺わせてください」という読者から連絡をいただき、誇らしかったことをよく覚えている。

この連載を賑わせたネコの手を借りて、次回も登場させようと思っていた矢先のことだった。多くの方から、「次回のおこげ社長の活躍を期待しています」と激励をもらっていたのに。17歳の誕生日会でも、凛とした眼差しでカメラに映ってくれたのに。

聞けば薬事日報の社員の方々も、時折登場する「創造の世界で、勝手に登記するようなネコ社長」の記事を毎回楽しみにしてくれていたらしい。



写真5：おこげちゃん、17歳のお誕生日パーティーにて 2024.7.11

連載は、彼への「はなむけ」になった。皆さんからいただいた多くの反響も、彼の最期にきちんと伝えることが出来た。それから、お別れと感謝の言葉を告げた。

彼がこの世を去ったときの表情は、日当たりの良い日にカーテンの裾でまどろむ姿そのものだった。それが、せめてもの救いを感じた。また明日も会える気がしている。

少し落ち着いたら、連載を再開したいと思う。その時が来たら、由緒ある新聞紙において、またアレな文体で書かせていただきたい。

その時が来たら、おこげが今も僕と一緒にいてくれるような、生き生きとした彼のエピソードを交えて表現したいと思う。

【了】